

OCI 同時通訳集中講座 講師宮田燿彰氏の講義録

山 里 恵 子

要 旨

本学で開催している、夏の同時通訳集中講座は、2つの大きな特徴を備えている。その一つは、講座が、本学の学生のみならず、県内外の大学生、一般社会人に門戸が開かれていること。二つ目は、プロの同時通訳者と本学の教員が共同して、授業を担当していることである。

ここでは、長年、この講座に関わってきた、プロ通訳者宮田燿彰氏の講義内容を紹介する。同時通訳と云う厳しい仕事の中で、宮田氏が体得したもの、通訳者が心得ておくべきものに焦点を合わせ、トータル・パフォーマンスの意味するもの、生同時通訳で最も重要な主語の処理法とは、どういうものかを見ることにする。

はじめに

沖縄キリスト教学院 (OCI) では、毎年、8月初旬に同時通訳集中講座を開設している。開設の発端は、本学に四年制大学を創設する一つの足がかりとして、新しく、社会に貢献できる科目を導入するというプロジェクトであった。本県は、観光立県であると同時に、国際会議開催・支援県として、グローバル社会に貢献することを目指している。この状況に見合う、人材育成の一つの良い手段は、「同時通訳者」を育てることであると、先の学長原喜美氏のヴィジョンに従うことになった。しかし、当時 (14年前)、本学には、短大があるのみで、高度な語学力と訓練を要求するこの分野を、誰が教える事が出来るのか、また、短大生が学び得るものかと危惧された。幸いに、同時通訳指導の第一人者であられる斉藤美津子博士 (2004年御逝去) の協力を得ることが出来た。斉藤先生は、国際基督教大学に同科目を導入し、多くの同時通訳者を育てられた教育者である。そして、先生ご自身が代表取締役として勤められていた株式会社コミュニケーターズは、大学卒、一般社会人を対象に、プロの同時通訳者を養成し、現在では、CNNへ同時通訳者を派遣するほどの優秀な同時通訳者養成機関である。斉藤先生は、その機関から毎年、優秀なプロ通訳者兼教育者を派遣して下さった。斉藤先生の教育理念を伝えることの出来る先生方である。斉藤先生ご自身が、指導の手綱 (厳しさ、優しさ) をとても上手に使いこなせる方だっただけに、おいで下さる先生方も、なかなか厳しく、楽しく、スリリングな授業を提供して下さる。お陰で、

短大生も、普段の授業には見られない真剣な学習態度を見せてくれた。授業そのものは、同時通訳、逐次通訳の両方を時間ごとに、日ごとに、担当者ごとにカバーする形式をとってきた。

本学は、2004年4月に四年制大学、人文学部英語コミュニケーション学科をスタートさせた。それに伴い、念願だった同時通訳関係科目 (基礎、初級、中級、上級) を通常のカリキュラムの中に組み込むことが出来た。現在、学期ごとに、順次に提供することが出来る。しかし、夏期集中講座は、プロと共同して開講される特別で貴重な科目として位置付け、本学の学生 (短大・四大) のみならず、県内外の大学生、社会人へも門戸を開き、グローバル社会へ貢献するという、本学の教育目標を達成するのになくってはならないものとなっている。講座は同時通訳I (これまでの初級) とII (これまでの上級) で、短大生・四大生、他大学生も単位互換制度で、2単位ずつ取得できる。同時通訳Iは、基本的には大学生用、IIは、社会人用で英検準1級以上の英語力と通訳・翻訳の経験があることを条件としている。後者においては、年々リピーターが増え、クラス全体のレベルが高くなっているのが感じられる。

今学年度は、通算13回目を数えた。同時通訳IIの受講者の中には、中学校・高等学校の英語教師、軍雇用者、防衛施設庁職員、通訳・翻訳者等、県内外の者がおり、講座のレベルの高さと、本学のこの講座開設の意義を確認することができた。また、同時通訳Iにおける本学の学生は、学期中のどの授業よりも、真剣

に学び、英語力向上に、同時通訳・逐次通訳へのチャレンジにと学習意欲を燃やし、プロの先生方の厳しい教えに耐え抜いた。

上記に見られるように、社会人用のクラスに於いても、学生用のクラスにおいても、素晴らしい教育効果がみられた。その教育の主要な役目を負っているのは、宮田耀彰先生で、宮田先生は、この講座に、第2回目から今日まで、連続12回、講師として、多くの受講生の指導にあたって来られた。その授業内容は、独特で、受講生を瞬く間に通訳者へと導いていく。同時通訳者としての心得、逐次通訳者としての心得を、余すことなく一人ひとりに教授する。その結果、社会人受講者も、学生も、8日間の集中講座で、かなりの学習成果を上げることができた。

上記の理由を持って、通訳に興味のある多くの方々に、宮田先生の授業内容を紹介し、彼らの自己開発に寄与したいと願う。本報告では、トータル・パフォーマンスとしての逐次通訳と同時通訳の諸学習事項(今回は、生同通について)を紹介する。授業の内容は、2004年度のものを中心とし、2005年度とこれまでのものを加味したものである。

I. 逐次通訳の場合

逐次通訳の場合、聴衆の面前で通訳をするのが常である。従って、語学力の外に、通訳者としてのコミュニケーション・スキルが要求される。スピーカーとの連携、聴衆への情報の伝達という役割の中で、宮田先生は、特に、聴衆への伝達を想定され、その効果的な方法を指導された。先生が、これまでに指摘して下さった事柄を次に紹介する。

1. 通訳の3要素：正確さ、意味、デリバリー

通訳には、3つの要素(正確さ、意味、デリバリー)がある。通訳は、そのトータルを駆使した、いわゆるトータル・パフォーマンスでなければならない。

1) 正確さについて

コミュニケーションには誤解がつきものである。人間のコミュニケーションにおいて完璧な伝達と認知は不可能である(コミュニケーションにおける誤解の構造)。例えば、同一の騙し絵も見る人によって別のものに見える。明るさ、長さ、音量も絶対的な認知ではなく、周囲の状況との相対的なものである。

プロの通訳者は、コミュニケーション・スペシャリストとして誤解を最小限度に抑えるためのスキルとセンシティブティを持ち、かつ誠実な努力が必要である。両言語の効果的な運用能力に加え、内容と背景の深い理解が、誤解(ひいては誤訳)を防ぐ前提条件である。事前の入念な準備と調査が通訳業務には欠かせない要件である。また、スピーカーとの事前打合わせによる、スピーカーの意図の確認、事前調査ではわからない概念や単語の質問、スピーカーの話し方の特徴と理解などがきわめて重要である。

2) 意味について

通訳は、意味を伝える仕事である。単に、言葉を他言語に変換しているのではない。言葉は文脈と状況によって異なる意味を持つからである。つまり、ある言葉を別の言語の相当する言語に単純変換しても、意味が通じないことが多い。

背景、文脈、スピーカーの目つきや声色から意図を汲み取って、その意味を別の言語で表現するのである。そこには推測という作業も伴うが、誤解を最小限度に抑えた正確な推測のためには、深い内容理解と背景知識が必要となる。初対面のスピーカーの意図を理解するためには、前述の徹底した事前準備が不可欠である。背景知識が無いと、スピーカーの発する言葉は単なる記号の連続にしか聞こえない。スピーカーの発する「記号」を通訳者が知っている別の言語の「記号」に置き換えたところで、意味をなさないのである。IT系の通訳で、そのようなケースが必要な場合もあるが、通常通訳では「てにをは」を付けただけの通訳では意味が無い。

徹底した事前準備に加えて、本番では全身全霊でのメッセージの受信と解読が必須である。通訳者にはセンシティブティが必要とされる。

3) デリバリーについて

通訳者は、メッセージを相手に発しただけでは相手が理解したという保証が無い。人間のコミュニケーションは一方通行ではなく、双方向のやりとり(interaction)である。通訳者が発したメッセージを相手がキャッチできたかどうかの確認が必要なのである。しかも、そのやりとり(transaction)の主要な部分が非言語(non-verbal)のコミュニケーションである。内容が

正確でも、相手に伝わらないことがある。通訳者が頼りがいのあるプロフェッショナルに見えるかどうか、non-verbal の要素が多岐である。デリバリーが下手な通訳者は、スピーチの意味を聴衆に効果的に伝えることが出来ない。

デリバリーの注意事項：アイ・コンタクト、フルエンシー、癖、姿勢、位置

3) -A アイ・コンタクト

デリバリーの中で、最も大切なのは目の使い方である。目で自分を表現し、そして相手の目からは反応をキャッチする。映画で2人の人物が向き合う場面を思い浮かべると、全く台詞が無い場合にでも登場人物の目を見るだけで実に多くのことがわかる。

アイ・コンタクトは聴衆を掌握する有力な手段である。具体的なテクニックとしては、聴衆全員を見るのではなく聴衆から2・3人を選択し、選択した2・3人に対して落ち着いた視線で目をフラフラさせずにじっくりと語りかけること。直接に目を向けられていない聴衆までもが自分に直接話しかけられているという気分になる。

均等にアイ・コンタクトをしようとしてあちこちと見回すと、目がフラフラして落ち着きが無くなる。これは、逆効果で禁物である。また、目をパチパチしたり、間違えたりした折に天井を見上げたりするのもよくない。聴衆が話題に集中できなくなるからである。

3) -B フルエンシー

通訳の途中で、どう通訳してよいかわからなくなる場合がある。そういう時にうかつに「アー」とか「エー」とかを数多く挿入したり、詰まって止まってしまったり、聞き手は流れに乗れなくなる。スピーチは音楽と同じ。間違えたからと言って曲の途中で止まるのは最悪である。つかえるのは人間だれしもあることだが、流れを止めないこと。リズムと流れと効果的な間をとって、聞き手を心地よくさせることが大切である。それが、「さすがプロ」という印象を与える重要な要素となる。トータル・パフォーマンスを考えて練習すること。

うまい声優の演技を思い浮かべること。一本調子ではありません。重要な部分を強調し、しかも音楽的な

リズム感と抑揚があるので、聞いていて心地よい意味が良くわかる。

練習方法としては、うまいスピーチを聞いてシャドウイングをして、リズムや間のとりかたのペースをつかむ方法が有効である。

ところで、英語と日本語のアクセントは異なるので気をつけること。英語は音の強弱を基本とするもので、音程の高低ではない。強く●弱く●というコンビネーションで特徴をつける。しかし、日本語は音程の高低「」である。また、日本語は、話し始めは高く、句読点のあたりでは低い。そして、次の言葉の入りでは、また高くなり、次の句読点で低くなる。語尾が高くなってはいけない。

例

I frequently make on-line shopping.

●

私は、オンライン・ショッピングをします。

3) -C 癖

人前に立つと、恥ずかしいという気持ちが自然に出てくる。恥ずかしさは人それぞれに様々な癖 (nervous mannerism) を表出させる。それは、自分をプロテクトしようとする現象である。通訳者や話し手の不要な癖は、聴衆を不安にさせる。聴衆が通訳者の癖に気を取られてしまい、落ち着いて通訳に集中できなくなるからである。通訳者はコミュニケーション・スペシャリストであるので、プロとして自分の癖を修正しなければならない。ボールペンをカシャカシャさせたり、片足をブラブラ揺すったり、片手を頭に当てたり、髪の毛を触る等の癖である。また、右手で左腕を捕まえ身体を隠すような態度は、自己防御の姿勢で、聴衆に心理的距離感を与えてしまう。

3) -D 姿勢

特に、身体全部で聴衆の面前に立つ場合 (机やスタンドが無い場合)、通訳者の立ち方が綺麗 (=普通) でなければならない。聴衆から見た美しい姿勢とはどのようなものであろうか。体のどこにも無駄な力のかからない自然な姿勢は、本人にとっても能力を最大限に発揮できる状態である上に、聴衆にとっても美しく

見えるものである。

つま先で両足均等に立ちリラックスしてから、次に自然にかかとを下ろし、状態がふわっと浮くような姿勢が自然体である。その状態では体の中心が下腹部にあるので、人前であがって頭に血がのぼる現象も避けられる。

よく見られる悪い姿勢としては、かかとに体重が乗って後傾姿勢となることがある。後傾姿勢は、エネルギーが前に出ずに精彩を欠いたイメージを与える。また、両足均等加重では無く、片足に体重を乗せた立ち方もよく見られる。片足加重の姿勢も、離れた聴衆から見ると左右のバランスが悪くだし無い。

次に、マイクの高さを自分の口の高さに合わせること。マイクの高さが合わないと、前かがみになったり後ろに反ったりで、姿勢が崩れてしまう。要注意。

メモを見ながら通訳する時、両手で持つと、お腹(身体の前面)を隠してしまい良くない。「癖」の箇所でも触れたが、通訳者の「防御」や「距離」を感じさせてしまう。ノート(メモ)は片手で胸あたりに来るように持ち、もう一方の手は大腿部に軽く沿え、お腹を開けるような姿勢をとる。そうすれば、聴衆とオープンな対面が出来て、心理的距離感を縮めることが出来る。

3) - E 位置 (position)

逐次通訳者の場合の立ち位置は、聴衆全体を掌握できる中心点であること。出来れば、スピーカーと隣の位置が好ましい。スピーカーが真ん中にいて、通訳者が端の位置では、聴衆はスピーカーが話す番では真ん中を見て通訳者の番では端を見ることになるので、スピーカーと通訳者の一体感が損なわれる。また、スピーカーと通訳者の距離が離れすぎていると心理的な距離感(psychological distance)が出来るので、その空間と聴衆に見合う距離の設定が必要である。

また、通訳者と聴衆の間に障害物があると、コミュニケーションの障害となる。通訳者と聴衆の間に暖かいコミュニケーションが生まれるような位置設定が必要である。

なお、会場によってはスピーカーの音が聞きにくい位置が存在する。通訳者は、事前の入念なチェックを通じて、スピーカーの音が楽に聞こえる位置を選択しなければいけない。

2. 訓練中、先生が頻繁に発せられた注意事項

- ・こちらばかり見ない。
- ・左手の位置に注意。ノートを脇へ抱えこまない。お腹を見せて。
- ・「エート」は言わない。
- ・声は大きく、元気良く。
- ・もう少しリラックスして。顔が緊張しすぎて恐い。
- ・言葉にとらわれしないで。意味を訳すこと。
- ・早口すぎる。もう少しゆっくり。
- ・フルーエンシーとリズムが無い。これは、シャドーウイングの訓練で克服して。
- ・口をはっきり動かして。モニヤモニヤしない。
- ・頭を上下に振らない。
- ・目をパチパチさせない。フラフラさせない。目でものを言って。
- ・もう少し自信を持って。
- ・身体をクネクネしない。
- ・言葉に詰まったら、関連語で繋ぐ。リズムカルに。
- ・文法の間違いを気にしすぎない。話し言葉は完璧ではないから。
- ・語尾を上げない。
- ・ノートにメモするものは、自分がわかればいい。
- ・ボールペンをカチャカチャさせない。

これらの言葉は、何度と無く、それこそ、一人一人に浴びせられた。端目には、何もそこまでしなくてもと思うほどの回数であった。しかし、注意を受けている当の本人は、顔を赤くしながらも、途中折れることなく、綺麗な言葉になるまで発声を繰り返した。次に、その実際のやり取りを紹介する。

3. 逐次通訳訓練の実際

日本人が、通訳者として評価されるのは、日本語力だと言われる。宮田先生の訓練も、受講者の日本語に、否応なくメスをいれられた。スピーチが日本語の時も、通訳が日本語の時も、受講者が発した日本語への徹底した矯正が行われた。受講者はスタンダードな日本語教育を初めて受けるため、ためらいがちにも真剣に、この時とばかりに日本語の音声表現を学んだ。訓練はすべて、トータル・パフォーマンスを目指すもので、

自分の姿をビデオカメラで撮影してテレビモニターに映し出し（自己認識 self-awareness）、自分のパフォーマンスを見ながら行われた。受講者のパフォーマンスと宮田先生の注意は、次の例で示す。受講者の発声及びパフォーマンスをSとし、先生の注意を

Tで表す。記述は、出来るだけ、実際の発話に沿うようにした。ただし、繰り返しが多すぎたり、視覚的に分かりにくいものは、読めるように編集した。

（対話記述の読み方：Sの行で空白になっているところは、下行のTの言葉を入れて読む。）

例1 日本語のスピーチ

- { S: トー（出だしのはにかみの声）、 彼の歌のなかで一番好き
 T: 「トー」は言わない。
 S: なのは、エー
 T: 「エー」は言わない。もう一回初めから。
 S: 彼の歌の中で一番好きなのは、 クリスマスソングのアルバムの中でも、
 T: はい、誰を見ていますか。
 S: ママがサンタにキスをしたという曲です。これは、数あるクリスマスソングの中でも、
 私にとっては一番エー この曲は、私
 T: 「エー」が入った。そこは、感情を込めて。
 S: にとって、数あるクリスマスソングの中でも一番のものです。もし、まだ聞いた
 事のない方がいらっしゃれば、是非、聞くことをお勧めいたします。
 T: はい、OK。

英語へ通訳

- { S: My favorite song is ... my favorite song is "I saw Mommy Kissing the Santa
 Clause" in Christmas song. I think it is a best Christmas song in many songs.
 If you have never listened to his song, please listen it. エー... I'm sure
 T: 間違いそうになったら適当
 にごまかす（処理する）。まごまごしているとよけいに間違ったような感じになる。
 S: If you have never listened to his song, please listen it. I'm sure you will like it.
 T: OK. いいよ。

例2 英語のスピーチ

- { S: （マイクの前に立つ）
 T: どこ見えますか。自分の姿をテレビで見て。マイクの前に立って。
 S: Today, I'm going to talk about Michel Jackson. He used to be a super
 star, super hero.
 T: どこ見ていますか。誰を見てるんでしょう。二名くらい見て下さい。
 初めから。
 S: Today, I'm going to talk about Michel Jackson. He used to be a super hero to me.
 T: そう。He used to be a super hero は一番重要だから相手に訴えないと。
 S: He used to be a super hero to me when I was a child.
 T: 目パチパチしない。目パチパチして
 いるのは、恥ずかしいとか自信がないとかの印象を与える。パチパチは止める。

- { S: Today, I'm going to talk about Michel Jackson. He used to be a super star, super hero to me when I was a child. Now is he is ...
 { T: パチパチしない。
 { S: Now he is not a super hero any more. He got ah ... he was at the peak in his popularity when he
 { T: はい、目パチパチしないで、もう一回。
 { S: When he have album "Thriller."
 { T: はい、目パチパチしない。
 { S: So, I think he changed totally before he became popular and after that ...
 { T: はい、
 目で伝える。それで、フルーエンシーに気をつけて。
 { S: that. However, so I don't admit that the same person before. He changed and him at present. So ...
 { T: はい、終わりです。

日本語への通訳

- { S: きょうはノ きょうは、 マイケル ジャクソンについてノ
 { T: きょうは、 語尾は上
 がんない
 { S: マイケル ジャクソンについて、話したいと思います。彼はかつて、私にとってスーパーヒーローでした。しかし、こんにち彼は、もうスーパーヒーローではありません。彼はエー アルバム「スリラー」を出したころノ
 { T: 「ころ」で上げない
 { S: 人気がありました。とても人気がありました。 しかし彼は、人気ガ
 { T: 目をパチパチしない
 { S: でた後変わってしまいました。... エート
 { T: はい、フルーエンシー。分からなくなつたところで、適当な言葉でつなぐ。「今日は晴天なり」とか (爆笑)。言葉でつなぐより他はない。
 { S: 私は、前の ... 人気が出る前の彼と、今の彼が同一人物とはとても思えません。
 { T: OK.

例3 日本語の抑揚について：話し始め、句読点の前後の音の高さの例

- { S: 夏場になると 夏場になると
 { T: いま、はじめ (話し始め) 低いじゃない。夏場になると
 { S: ある ホームページ ペイレスシューズというサイトでノ
 { T: ほら、「で」で、上がったでしょう。ある ペイレスシューズというサイトで、

- S: ある ペイレスシューズというサイトで、手ごろで
 T: ほうら、「で」が上がったでしょう。
 手ごろで でしょう。
 S: 手ごろで、多様、デザイン豊富なサンダルや ミュールを検索するのが好きです。
 T: そー。必ず、間
 が開いたとき、点 (、) がついたとき、000で、000で、そして、まる (。) が付くと
 きは、それぞれの終わりまで来たら、音が下がって、次の言葉では、音を高くして
 入り直します。

II. 同時通訳の場合

1. 同時通訳を生でする場合 (生同通)

生同通とは、原稿のない同時通訳である。話の内容を初めて聞くので、何が出てくるのか分からない。かなり、スリリングで怖い仕事である。ここでは、その仕事をこなすコツを紹介する。

同時通訳は、文の頭が聞こえたらすぐに訳し出さなければならない。ちょっと聞いて分かってから訳そうとすると、既に手遅れである。次の文章が始まってしまふから。内容が自分の予想とは、違った方向に向かうリスクも否定できないが、それでも頭から直ぐに訳し始めなければならない。

1) 主語の扱い

日本語の文法は英語の文法と違い語順が異なるのは、ご承知の通り。問題は、一つの文を理解するには、文章の最後まで聞かないと分からないにもかかわらず、同時通訳の場合には頭からすぐに訳さなければならない。この場合に注意しなければならないのは、主語の扱いである。主語をそのまま訳したのでは、語順の違いから後の処理が難しくなる。例文で検討してみよう。

例：通訳 (日→英)

「私は、OCJC の同時通訳クラスに行く途中で、犬を見たような気分になりました。」

- ・この長い文を最後まで聞いてから訳そうとすると、その時点では次ぎの文章が始まっているので、別の文章を聞いて理解しながら前の違う文章を通訳することになる。それは不可能な作業に近い。たとえば、次に出てきた文章が「1兆3千6百65万匹の中の1匹だったんです。」だと、もうタジタジである。間に合わない。従って、頭からすぐに通訳を開始するという条件と、語順が異なるから頭からの順序で

は言えないという、相反する命題を解決しなければならない。その命題の解決手法の1つが主語の処理方法である。

- ・主語の「私は」を「I」と訳してしまうと、文尾の「気分になりました」まで、待たなくてはならなくなる。「I come to feel …」となってしまう。動詞が分からないと言えなくなる。
- ・主語の「私は」は、「in my case, talking about myself, regarding myself, when I talk about myself」にすると対処しやすい。主語が、人間以外だと「in terms of ~」でもよい。
- ・少し極端だが、全て頭から順番に通訳を試みる。
 私は、 /OCJCの同時通訳クラスに行く途中で、/
 In my case, / on the way to the OCJC interpreting class /
 犬を見た / ような気分になりました
 I saw a dog / or another. I felt that kind of feeling.

2) デリバリー

逐次通訳のデリバリーは、通訳者の全身が聴衆に見えるため、トータル・パフォーマンスを重視する。同時通訳では、通訳業務がブースの中で行われるので、通訳者の姿かたちは聴衆には見えない。聴衆が受け取るのは、通訳者の音声のみである。そこで、「声」が重要な要素となる (air personality)。同時通訳者は、声美人、声ハンサムになって欲しい。軽快で心地よい声と、意味がわかりやすい抑揚が必要である。また、通訳の途中で、考えるための無意味なポーズを置かないこと。語順が異なることと、先に何を言うのかわからないことから、待ちのポーズを置きがちであるが、それではとても聞きづらい通訳になってしまう。フルーエンシーを保つこと。音楽のように、滑らかにリズムカルに。途中で分からなくなったとしても、単に止まらないで、きちっと文章を完結するこ

と。悪い言葉ではごまかしであるが（関連語で処理する）、そこから先に進んで意味が理解できれば訂正のリカバリーが効く。また、少しわからなくなった場合にでも、次の文章の入り口で、絶対に遅れないこと。遅れると、その後の処理が更に難しくなる。

同時通訳専用のマイクは逐次通訳用の会場マイクと異なり感度がよいため、小さな音でも拾う。通訳者は、「息」の使い方にも気をつけ、耳障りのないように努力すること。たとえば、鼻息とか、息の吸い込み・吐き（スー、ハー）は、レシーバーを通して聞くと驚くほどの雑音となる。息のほかに、メモ用紙、原稿用紙をめくる音も耳障りである。このような音を絶対に立てない気配りが大切。

3) フィードバック

通訳の訓練で重要なのは、自己認識 (self-awareness) である。自分の声、姿、パフォーマンスを、自分で認識することで初めて改善の努力が始まる。自分の声は、自分の顔の骨を伝導して聞こえるので、他人が聞く自分の声とは異なる。また、自分の姿も自分には見えない。従って、自分の通訳やスピーチは必ずテープに録音してプレーバックすること。また、自分のパフォーマンスもビデオに録画して見直すこと。

初期の学習者は、自分の声と自分の姿をテープやビデオで見ると、愕然とするものである。自分が想像していた自分と大幅にかけ離れているからである。その認識が出来る時、理想に向けての改善作業がようやく開始される。

4) 2人1組の仕事

同時通訳は大変な集中力を要するので、通常2人ないし3人1組の態勢をとる。大抵15分おきに交代をする。一人が通訳をしている間、そのパートナーは、ヘルパーとして、通訳の手伝いをする。相手が理解できていないとか、聞き漏らした件がある場合には、即座にメモ用紙に書いて示す。自分でも分からなければ、さっと辞書を引いて知らせる。数字の場合はなお更である。同時通訳中は、話しを聞きながら自分も話し、しかも資料を見たりスピーカーの表情を見たりと大忙しである。従って、時間的に余裕のあるパートナーのヘルプは貴重である。

2. 生同通練習

ここでは、センテンスを用い、話の「出だし」の処理の仕方を学ぶ練習（日→英）である。スピーカーをSで表し、同時通訳者をDで、先生をTで表す。

例1

- S: 日本の自衛隊が、イラクにいることは、・・・
 D: Japanese Self Defense Force
 T: Japanese Self Defense Forces で始めると、後の言葉をどうやって訳し続けるか、難しくなってくる。スピーカーは、この後、何と言ってくるか分からない。そういう時は、"Regarding Japanese Self Defense Forces" とまず言って、
 "They are in Iraq." と続けておく。それでは、スピーカーさん、あと続けて下さい。
 S: 私は、良いとは思いません。
 D: I don't think it is a good idea.
 T: OK. うまくつながりました。

例2

- S: 8月8日水曜日の夜に、第二次世界大戦における・・・
 D: August 8, Wednesday, at night, World War II
 T: at night の後、「世界第二次大戦が」と主語のように訳してしまうと、後が言えなくなる。"Regarding World War II" と表現すること。"World War II at"なんて、言えるはずが無い。スピーカーさん、次を言って下さい。

- S: 戦争における惨禍についてのドラマがありました。
- D: 「さんか」…?
- T: 「惨禍」。難しい言葉ですが、difficulty 或いは disaster でよい。言葉にとらわれないこと。意味を考えて。Disaster of the war was broadcasted. War became a story for a TV program. と言う事ができる。スピーカーさん、次行って。
- S: また、昨日、8月6日金曜日、59年まえ、広島に原爆が落とされた日でもありました。
- D: Yesterday, August 6, Friday, 59 years ago, Hiroshima …
- T: はい、その
の処理、とても難しいです。“It’s a day / was a day when the atomic bomb was dropped over Hiroshima.” となります。

III. 学習曲線について (learning curve)

通訳のスキルの習熟度は、トレーニングの期間に一直線で上がるものではない。ある時は全く伸びない (plateau) 時期があり、その後突然に開眼して飛躍し、そしてまた plateau が続き、また飛躍する、というサイクルの繰り返しである。Plateau の期間は進歩が無いのではなくて、成熟に必要な蓄積と熟成の過程である。しかも、その plateau の期間とサイクルは人それぞれである。通訳学習の大切なポイントは、伸び悩んだからと言ってそこで訓練をやめないこと。また、他人と比較をしないこと。自分のペースで長く継続することが、全てに勝る成功への鍵である。

終わりに

今回は、同時通訳者として、世界中を駆け巡っておられ、コミュニケーターズで、また、本学で、同時通訳の教育に携わっていらっしゃる、宮田燿彰先生の授業そのものを2004年度を中心に紹介する運びとなっ

た。逐次通訳、同時通訳とどの指導においても、きめの細かさ、通訳者としてのマナー、教育者としての情熱を感じるものばかりである。次回には、講演の内容も盛り込んで、更に、多くのものを紹介したい。

注記

- 1) 宮田燿彰氏の講義録は、2004年度の講義「逐次通訳と生同通」を中心に2005年度のものを加味したものである。講義のテープ興し、演習中の受講者の発表・宮田氏の諸注意のまとめ、全体的編集を筆者が担当した。宮田氏は、自ら加筆・修正の労を担ってくださった。そしてまた、授業内容を講義録として本紀要に掲載することを快く承諾してくださった。衷心より感謝申し上げます。
- 2) 宮田燿彰氏の略歴
三井物産に在職時から斉藤美津子氏のもと同時通訳者・通訳養成講師として、金融や貿易、経営、IT 関係などさまざまなビジネスの場面で活躍。1993年からフリーの会議通訳者。沖縄キリスト教学院大学・短期大学の「同時通訳講座」には、1994年の第2回講座 (旧プログラム) 以来ずっと講師として参加していただいている。株式会社コンフォート代表取締役社長。

Lecture Notes on Interpretation by Teruaki Miyata, Simultaneous Interpreter

Keiko Yamazato

ABSTRACT

The intensive simultaneous interpretation courses held in the summer at the university have two unique characteristics. One is that the program is open not only to our students but also to students from other colleges as well as adults. The other is that the courses are conducted by teachers of this institute and professional simultaneous interpreters.

In this paper, Mr. Teruaki Miyata's lectures are introduced. His lessons are a mastery of the wealth of experiences gained during the rigorous work of simultaneous interpretation. His focus on points that interpreters should be aware of and combine in practicing for a total-performance will be touched upon as well as the most important method for dealing with the subject of each sentence in a speech without the manuscript.